

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

INF全廃とビキニ事件

小川 岩雄

INF (中距離核戦力) の全廃条約がいよいよ米ソ首脳の手で調印される。この条約で廃棄される核兵器の量は、米ソ等が現在保有している核兵器全体の五割にもならないが、しかし史上はじめて核兵器の実質的な削減が実現する、という点で、その意義は大きい。

とくに中短距離核はICBM (大陸間弾道弾) などとくらべて、飛行時間が短かく、先制的に使われやすいなど、核戦争を招く危険がずっと大きい。そのため配備には当初から各国民が強く反対していた。それだけに、こんどの全廃は、さし迫った危機の回避という意味でも重要な措置といえる。

米ソの現政権は、さらに進んで戦略核や艦載核の半減をめざしているが、こんどの条約成立がそのような本格的な核軍縮への有効な第一歩となることを、心から期待したい。

戦後四十年以上もの間、米ソ両超大国は、時折いくらかの緊張緩和はあったものの、ほとんど一貫して軍事的、政治的な対決と、果てしもない軍備競争を続けてきた。その米ソが、それぞ

れの国内や同盟国内で軍拡から巨大な既得権益を得てきた産官軍複合体などの勢力の執拗な抵抗を押し切って、急速に和解と軍縮のみちを選ぶことに踏み切ったのは、なぜであろうか。

そこにはさまざまな政治的理由も考えられようが、やはり何と云っても無視できないのは、ぼう大な軍事費を湯水のように使い続けてきた両国の経済上の行き詰まりと、世界を被う反核世論の高まりであろう。

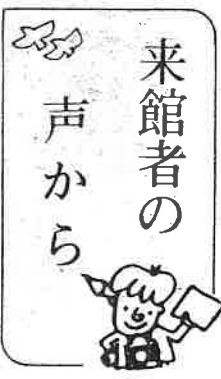
中でも、米ソに最も直接的なインパクトを与えたのは、数年前両国が大量のINFを配備しようとして遭遇したヨーロッパの激しい反核運動であった。ところでヨーロッパの市民たちをそのとき反核へと促したのは、「ヨーロッパのヒロシマ化——いわゆる「ユーロシマ」——の恐怖であった。四十年前も前の広島・長崎の悲劇と被災の現実を、地球の裏側の市民たちが皆知っていたのである。これこそは、わが国の被爆体験に根ざす国民的な原水爆禁止運動の国際的な拡がりの大きな成果だったのではなからうか。そして、その原水

禁運動の直接の契機となったのは、一九五四年三月の第五福竜丸被災をはじめとするいわゆるビキニ事件だったのである。

このビキニ事件では、いくら超大型とはいえ、ただ一発の水爆の爆発実験からの「死の灰」が、爆心から一六〇キロも離れた洋上で操業中の漁船の乗組員二三人全員に激しい急性放射線障害を引き起こし、一人が亡くなったほか、近隣の島民にも多数の被害者を出すなど、すさまじい威力を示した。これは国内はもとより、諸外国にも強い衝撃を与え、とくに多くの科学者に全面核戦争の脅威を痛感させた結果、翌一九五五年にはよく知られたラッセル・アインシュタイン宣言が発表された。その呼びかけに答えて五七年に発足した科学者の国際会議「バグウォッシュ会議」は、今日まで熱心に会合や活動を続け、各国首脳への核軍縮の呼びかけと人々への訴えを繰返し、反核世論の形式に貢献してきた。市民や科学者のこのような努力の積み上げが、結局は歴史を動かすことになったのを目撃して、深い感慨を覚えずにはいられない。(立教大学名誉教授、第五福竜丸平和協会理事)



手で触れた第五福竜丸



来館者の声から

もしぼくが大人になったら、どこかのようなひさなことはおこさないで平和なよのなかを作っていきます。(桜小五年、須賀俊也)

今日は学校の授業でここへ来ました。どのようなものがあるのかわからずに来ました。核に対す

るあらゆる資料が置いてあり、とても勉強になりました。(姉川)。

しばらくぶりに日本へ帰って来た。私は航空自衛隊の隊員で、現在はアメリカ空軍航空大学管轄の空軍航空医学校にて、飛行訓練の片やら研修を受けている(航空医学)。私は約十年前の入隊時、ただだに、飛行士に憧れて入隊した。今にしてみれば、自衛隊の航空機は戦争—殺人行動に結びつくものである。こんな単純なことに気付かなかったとは、私の生まれ代が安泰し過ぎていたのだろうか? 今、私の搭乗している戦闘機が空を飛び回っただけのものになることを願うのみ。平和の証し。

●耳で聞き手で触れ肌で感じる
第五福竜丸は彼らに何を語ったのだろうか—十一月二十三日、全日本視力障害者協会の各地の代表十五名が来館。「私たちにどうして耳で聞き手で触れ肌で感じることを貴重な体験。今日得た知識、感じた怒りを力に平和を守り視覚障害者の生活と権利を守る活動に踏み出します」との便りが届いた。

(三面よりつづく)

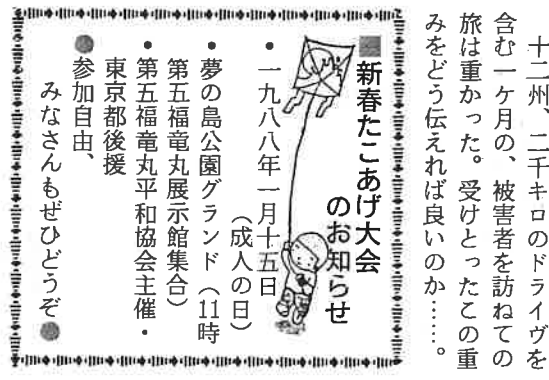
英国核実験退役軍人協会の調査によれば、会員の子供の千五百人中、約三分の一から異常が発見されたという。放射線は、確実に次の世代を蝕みつつある。

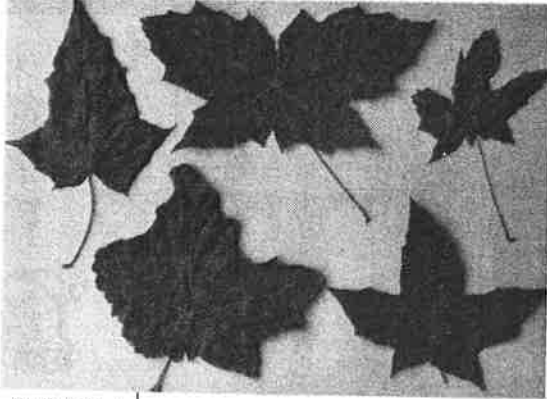
この大会の前後、西海岸で在米被爆者を取材した。被爆者と分れば保険に入らず、ばく大な治療費を払わされる実状を知る。スリール島では八年前の事故当時から続く核被害、最初は家畜の死と奇形、次に住民のガン、白血病、そして今は植物の奇形と現在進行形の恐怖を見聞きする。現地で住民に聴く話は、切々と胸を打つ。中西部の、ニューメキシコ、アリゾナ、ユタとインディアン居留地をレンタカーで走る。あちこちにウランを取ったくず、鉱滓の山がある。風に吹かれて舞い上り、水に流されている。汚染された草を食む羊や牛。禁酒区の居留地から出て近くの町で朝から酔っぱらっているインディアン。何度も道に迷った末、ホピの聖地、ビッグマウンテンにたどり着く。西の地平線に沈む大きな太陽、満天の星。インディアの集会は、折りと、太鼓、ゆるやかな歌で始まった。焚

新春たこあげ大会のお知らせ

一九八八年一月十五日 (成人の日)

- 夢の島公園グラウンド(11時)
- 第五福竜丸展示館集合
- 第五福竜丸平和協会主催
- 東京都後援
- 参加自由
- みなさんもぜひどうぞ





1986年秋、原発の北北西地域(距離不明)で採集したカエデの葉。中央の突出部がなかったり、いずれも変形している(撮影・豊崎博光氏、アサヒグラフ1987年11月27日号より)

九月二十六日から十月三日迄、ニューヨーク市で開催された、第一回核被害者世界大会に出席した。三十カ国から三百人の人が参加し、世界中に広がっている核被害者の実態が明らかにされ、国際的連帯を決議した。出席した被害者の顔ぶれは多彩である。ウラン採掘現

世界の核被害者を訪ねて

平和のためのヒロシマ通訳者グループ代表

小倉 桂子

九月二十六日から十月三日迄、ニューヨーク市で開催された、第一回核被害者世界大会に出席した。三十カ国から三百人の人が参加し、世界中に広がっている核被害者の実態が明らかにされ、国際的連帯を決議した。出席した被害者の顔ぶれは多彩である。ウラン採掘現

今回特に注目を浴びたのは、二十数人の先住民達、つまりアメリカ、カナダのインディアン、豪州のアボリジニ、スエーデンのラップ人などのパワーである。開会、閉会には彼等の祈りや歌をとり入れ、インディアンホピ族の酋長の語る昔から伝わるホピの予言「母なる大地を切り裂き、鉱物資源をとり出せば大きな災いが来る」とに耳を傾け、彼等の手料理を味わう。全体集会での一般的報告のあと

は、分科会で、様々な討議があった。米国学者の図を使つての大気圏核実験や、チェルノブイリ事故後の、アメリカでの死亡率との関係は実に興味深い。又、被ばく兵士の分科会では出席者が少人数のせいしか体験談は細部にわたる。ネバダなど数カ所の核実験場をたらい回しにされた黒人兵士ゲイティスさんは、実験の際墮壕に入ってもええ、立たされたままだったという。又いつも先頭を歩かされた。英国兵士として、モンテペロウ島の実験に参加したグレイさんは自分でなく四人の子供全員に異常があるという。流産した子供の内の一人は、ゼリー状の奇形児であった。

自分の家族の話を含み隠さず話してくれた人達の一人に、ネバダ核実験場の風下に住む、ユタ州から来たピーターソンさんがいる。彼女は、ウラン抗夫だった父をガンで失い、姉と六才になる娘はそれぞれガンで重体、何人かの友人も白血病で失った。インディアン居留地ではウラン鉱山や、精練所、ウランを取った後の鉱さいによるガン患者が多い。荒れ地に追いやられ、核被害に逢い、差別に苦しむ彼等の話は悲惨だ。日夜語られる彼等の話は現在進行形であり、かつ、核被害者として認知されている日本の被爆者と違い、認知されざる隠れた事実である。日本の被爆者の語る八月六日、九日を中心瞬間的大量被爆と惨事、つまり原爆投下の日、炎に追われて逃げる地獄図よりも、それ以後の見えざる核の恐怖について彼等は知りたがる。放射線被害は、どの様な形で、いつ頃始まったのか。髪が抜けたりガンや白血病患者は何人いるのか。少量で長期にわたる被ばくで、毎日、日常的に放射線の影響を人体生活に受けている外国人被害者にとり、最も知りたい事は、被爆二世の問題であり、原発地のデータである。しかし日本の被爆者の大半が、結婚の際の差別を恐れて、自分の子供の取材は嫌がる。外国人記者の取材通訳をする時、「家には近寄らないで下さい。娘が嫁入り前なので」という被爆者によく逢う。本格的二世調査を求める外国の被害者にどう答えれば良いのか。(四面へつづく)

平和随想 (十)

三宅 泰雄



ON DECEMBER 2, 1942
MAN ACHIEVED HERE
THE FIRST SELF-SUSTAINING CHAIN REACTION
AND THEREBY INITIATED THE
CONTROLLED RELEASE OF NUCLEAR ENERGY

アメリカが原爆製造計画(マンハッタン計画)の実施に踏み切ったのは一九四一年十二月六日(日本宣言の二日前)でした。最初の原子炉の開発はシカゴ大学冶金研究所の名目で、極秘のなかにスタートしました。原子炉の組立は大学競技場の建物のなかで行なわれ、早くも翌年十二月二日に世界最初の原子炉が完成しました。開発の主役はエンリコ・フェルミ(イタリヤ人)と命科学者でした。この原子炉はシカゴ・パイル一号(CP-1)と呼ばれました。私が一九五六

年にシカゴ大学を訪れたときには、競技場はまだそのままで、原子炉の完成を記念するパネルが、壁にはめこまれていました。パネルには一九四二年十二月二日に、人類はここで最初の自律連鎖反応を達成し、またそれにより制御可能な核エネルギーの開放を開始した」と記されていました。【カット】その後、競技場の建物は放射能汚染のため、とりこわされてしまいました。私はそのとき、ハロルド・ユリー教授の研究室のセミナーで、海洋放射能汚染について講義をしました。ユリー(一九九三—一九八一年、重水素の発見者、一九三四年ノーベル化学賞)はマンハッタン計画の有力な指導者の一人であり、原子力委員もつとめていました。しかし、核兵器の将来については、きわめて悲観的で「人類は自ら開発した兵器の、すべてを必ず実戦に用いてきた。原水爆も決して例外ではありません」と言っていました。これは、おそらく、核兵器の開発に関与した科学者に共通の、悩みと恐れではなかったでしょう。その後、ユリーはカリフォルニア大学に移り、平和運動に参加しました。



この原爆が果して爆発するかどうか、科学者の間でも議論が分かれ、爆発するとした人さえ、爆発力をかなり過少評価していました。しかし、プルトニウム原爆の爆発力は、予想をはるかに超える、すさまじいものでした。私はその場所を、この眼で見たいと思つたのです。会議の休日の朝早く出発しましたが、まもなく砂漠地帯に入り、行けども、行けども、まばらな雑草と灌木の砂地の間を走りつづけました。途中にソコロという小さい町があり、ここには有名な空電の研究所がありました。時速一二〇キロで、五時間以上も走つたのち、やっとアラモゴードにつきました。遠くに国境の山脈が連なっていました。原爆実験場のトリニティー・サイト(通称、「死の旅」)は立入禁止となっていましたので、遠くから眺めることで満足しました。このあたりは極度の乾燥地帯で、硫酸カルシウム(石膏)の大きい結晶があちこちに石ころのように転がっているのに驚きました。人類の歴史を大幅に変え、今なお、人類の存続に暗い影を落しているこの場所にたどりつくことができ、感無量でした。原爆実験が行われた同じ日に、あと二つの原爆が、高速巡洋艦インディアナポリス号に積みこまれ、テナン島にむけて、サンフランシスコ港を出発していたのです。原爆の成功は、即刻、ポツダム会議に出たトルーマンに報告されました。トルーマンはそれとなく、このことをスターリンに告げましたが、スターリンは全く無表情であったと伝えられています。ソ連でも、そのころ、すでに原爆の開発に着手していたのです。